

● 出題の基本方針

出題の基本方針は、例年通り①基礎的な英文法が身についているか、②英会話の流れを把握し、慣用表現を正確に理解できるか、③短い英文とやや長い英文を正しく理解できるか、という英語力を見ることです。

● 出題内容とねらい、採点講評

第1問は、基礎的な英文法を問う問題でした。1日目の全体の正答率は53%で、想定より少し低い結果となりました。最も正答率が低かったのが⑤で26.6%でした。この問題は簡単な算数の式の英語での読み方を問うていましたが、動詞がisであるという文章の構造がわかれば英語で算数を学んだことがなくても解ける問題でした。2日目の全体の正答率は52%で想定より少し低い結果となりました。最も正答率が低かったのが①で正答率は27.7%となっていました。superior to で比較しているものは、His English speaking skills で He ではありません。したがって、superior to の後ろは私の skills に該当する mine となります。文法はパターンを覚えれば解けることが多いので、きちんと文章の構造を読み解くようにしてください。

第2問は、会話の中で使われる慣用表現の知識を問う問題です。1日目の全体の正答率は約51%で、やや難しかったと言えます。正答率が特に低かったのが⑫でした。Aが「あなたはゲームやりすぎだよ」と忠告し、Bが「わかってるよ」、「でも、我慢できないの」と答えています。「我慢できない」を意味する“I can't help it”の表現が難しかったようです。2日目の全体の正答率は42%で、難しかったと言えます。正答率が特に低かったのが⑪でした。Aが「間違えてあなたの傘を持っていった」とBに伝え、Bが「事情が理解できたよ」、「教えてくれてありがとう」と応じています。「事情が理解できたよ」を意味する“I get the picture”の表現が難しかったようです。慣用表現を身につけるだけでも、英語のコミュニケーション能力がかなり向上します。

第3問は、英文法の知識や語彙力をベースに、短文を読む能力を問う問題です。1日目の全体の正答率は60%で、予想通りの結果となりました。正答率が低かったのは⑩でした。「山を探索する際は、責任をもつように心がけよう」と読み取れれば、正答の③responsible を導けたはずです。⑧の正答率も低かったです。「山へ旅行する時期は、どのような探索やどの

ようなアクティビティをしたいかによって異なる」ということですので、④depends が正解です。2日目の全体の正答率は約58%で、やや難しかったと言えます。正答率が低かったのは⑦でした。「使い捨てプラスチックの問題は、その生産量の多さと、それをどのように処分するかという点にある」と読み取れれば、③how much が正解だとわかります。⑥の正答率も低かったです。「プラスチックが私たちの生活の一部であることは間違いない」ということですので、「間違いない」または「疑いの余地はない」と読み取れれば、正答の②question を導けたはずです。

第4問は、長文を読む能力に加えて、文章全体の意味を捉え、著者の考えや主張を理解する能力を問う問題です。1日目の全体の正答率は約44%で、難しかったと言えます。正答率が特に低かったのが④でした。前後の文脈から文中の空欄に当てはまる語句を選択する問題で、「ゴルフコースは試合が終わってしまえば、ただのゴルフ場だ」という意味で、正解は③once となります。2日目の全体の正答率は約55%で、やや難しかったと言えます。正答率が特に低かったのが⑦でした。前後の文脈から文中の空欄に当てはまる語句を選択する問題で、「飲料メーカーのサントリー食品インターナショナルは、別の日本企業である富士通のAI製品を使って実験している」という意味を読み取れば、正解は③experimenting とわかります。文章全体の意味を理解するうえで当てはまる語句を選択してください。

● 学習上のアドバイス

英語問題を解く基礎となるのが文法と単語です。語彙・文法の知識を身につけることは、文法問題、短文・長文読解の問題を解くための大前提です。そして、英語慣用表現は英会話ができるのに不可欠なものになります。文法、語彙、慣用表現を身につけるためには暗記が最優先で、その後に問題集を解いたりすると効率的でしょう。英語力を伸ばすにはたくさんの演習が必要なので、繰り返し問題を解くよう心がけましょう。また、長文読解問題は著者の考えや主張を理解する能力を問う問題なので、普段学習する際、文章のタイトルや著者の観点を示すセンテンスを理解するように心がけてください。

出題の基本方針

国語は、様々な分野の論説を素材として、文章間の論理的なつながり、各文章の正確な理解、文章全体の趣旨の把握を問うという基本方針で出題しました。

出題内容とねらい、採点講評

【1日目】

第1問は、岡真理『ガザに地下鉄が走る日』から出題しました。国際的に大きなニュースとなっている、ガザ地区で暮らすパレスチナ人に関する文章です。様々な情景や揺れ動く作者の心情の描写を、丁寧に読み取ってゆくことが求められます。全体の正答率は約61%で平均に近い難易度でしたが、問3・問9に関しては誤答を選んだ受験生が多くいました。設問の直近の記述だけでなく、文章全体の論調をしっかりと理解することが重要です。

第2問は、古館恒介『エネルギーをめぐる旅 文明の歴史と私たちの未来』から出題しました。一哺乳類として誕生した人類が生存競争を勝ち抜き、現在の繁栄を手に入れた大きな要因が火の利用であったことが説明されています。比較的読みやすい文章だと思います。そのため問題としては、下線や空欄の前後だけでなく、文章全体を把握しないと解答が得られないように意図しました。全体の正答率は約65%で想定よりも少し高くなりました。ただ、問8だけは、正答率が他よりも大幅に低かったです。適切でないものを選ぶ問題であったことも原因かもしれませんが、「火の利用の前に肉食が始まっていた」ことは本文中にはっきりと書いてあるので、これが間違い（正解）だと理解するのは、難しい要求ではなかったと思います。

第3問の漢字の問題の正答率は約55%で、想定に近い値でした。ただ、問7（普及と言及）、問10（理路整然と自然）は約80%の正答率だったのに対して、問3（零細企業と零下）は約32%、問9（勸善懲惡と勸誘）は約23%と低い値でした。漢字の点数を伸ばすには多くの時間が必要になりますが、安定した点数を得ることができるので努力を惜しまないでください。

【2日目】

第1問は、外山滋比古『忘却の整理学』から出題しました。内容としては、思考をまとめるための忘却の重要性を主張したものでした。身近な題材で理解しやすい反面、言い回しが独特な点もあり、前後の文章を

丁寧に読み込み、行間を補うことがポイントになります。第1問の平均正答率は約55%で、平均的な難易度でした。しかしながら、問5・問6・問9の正答率が低かったです。問5に関しては、内容的にも正解にたどり着けますが、慣用句の知識があれば簡単に解けるものなので、普段から本を読む習慣をつけるようにしてください。問6・問9は空欄の近くだけを読むのではなく、広い範囲を読み込んで内容を理解する読み方が必要になります。

第2問は、小川幸司・成田龍一編『世界史の考え方』から出題しました。論理的な文書なので、紹介されている各論者の主張を丁寧に読み解く点がポイントになります。

第2問の平均正答率は約53%で、平均的な設問でした。ただ、問1の空欄補充では、最初の空欄に多くの選択肢が入る可能性があります。その際には、あとの空欄で確実に該当する選択肢から埋めていくことが大事になります。

第3問は漢字の問題です。基本的な漢字の理解を問いましたが、問7の正答率が低かったです。漢字の問題は継続的に勉強することで高得点が望めますので、日頃から新聞を読むなどしてください。

学習上のアドバイス

「コスパのよい」勉強法というものはありません。文章題については、論説を中心とした読書量を増やすこと、難解な箇所を徹底して考え抜くこと、漢字の問題については、わからない漢字をそのままにせず、きちんと調べることを心がけましょう。また、スマホやPCで文字入力する際にも、変換候補のバリエーションを注意深く観察するようにしましょう。日頃からの地道な積み重ねが全てです。

● 出題の基本方針

「数学Ⅰ・Ⅱ・A」の範囲から出題しています。出題の主な目的は、用語を正しく理解しているかどうか、基礎的な計算ができるかどうか、公式を理解して応用できるかどうかなどを問うことです。したがって出題の基本方針は、難問や奇問を避け、基礎的な問題とその応用問題を中心に出题することです。

● 出題内容とねらい、採点講評

【1日目】

第1問は基礎的な計算力を問う問題です。因数分解、対数、不等式、命題と条件、データの分析について出題しました。第2問は絶対値を含む関数のグラフについての理解力を問う問題です。絶対値の場合分けをした関数の導出、関数の頂点、直線と接する条件、 x 軸と平行な直線と関数が交わる条件、接線、積分に関する問題を出题しました。第3問は組合せの考え方と関連させて確率を計算できるかを問う問題です。数字の書かれた球が袋に入っていて、題意の事象が起こる組合せを考察し、確率を計算する問題を出题しました。

第1問全体の正答率は7割をやや下回る結果でした。問1は9割超、問2は5割～8割、問3は5割、問4は3割～6割弱、問5は4割～9割超でした。問2で問われていた対数の基本的な計算を特に確認しておきましょう。また、第1問全体の中で最も正答率の低かった問4は、命題と条件です。ある命題が真となる必要条件と十分条件を教科書の例を基に確認しておきましょう。

第2問全体の正答率は5割でした。問1は9割、問2は6割～7割、問3は5割弱～7割、問4は2割弱と4割、問5は4割、問6は1割でした。絶対値を含む関数のグラフの問題で、問1・問2の関数を導出する問題自体は正答率が高かったです。しかし、問4は異なる4個の共有点という絶対値を含まないと出ない問題だったためか、正答率が低かったです。また、微分法と積分法の基礎的な計算を確認しておきましょう。

第3問全体の正答率は4割でした。問1と問2はどちらも5割、問3は3割、問4は2割強の正答率でした。確率の計算だけでなく、条件に合った組合せを考える必要があったためか、全体的に正答率が低かったです。図形を利用した組合せの問題は教科書の標準的な内容であるため、教科書の例題に触れ確認しておき

ましょう。

【2日目】

第1問は基礎的な計算力を問う問題です。因数分解、絶対値を含む不等式、命題と条件、対数、データの分析について出題しました。第2問は2次関数のグラフについての理解力を問う問題です。グラフの頂点、グラフが x 軸から切り取る線分の長さ、グラフの対称移動、接線、積分に関する問題を出题しました。第3問は反復試行の問題です。問われている事象を正確に理解し、組合せの考え方をを用いることが求められていました。

第1問全体の正答率は5割強でした。問1は9割、問2は4割、問3は3割弱～4割、問4は2割弱と4割弱、問5は5割～ほぼ10割でした。問2のルートを含む計算は、場合分けを行い計算する必要がありました。ルートと絶対値の関係など、機械的な計算でない点を教科書で確認しましょう。また、必要条件と十分条件についても頻出であるため、教科書でよく確認しましょう。

第2問全体の正答率は4割でした。問1は6割～9割、問2は3割、問3は2割～3割、問4は2割弱～4割、問5は2割～5割強でした。頂点を求める問題はよくできていました。グラフの移動の問題は、平行移動や対称移動のように特定のパターンがあるため、よく確認しておきましょう。また、微分法に関して、導関数を計算できるだけでなく教科書で概念を理解し、平均変化率などにも対応できるようにしておきましょう。

第3問全体の正答率は6割弱でした。問1は8割～9割、問2は5割～7割、問3は1割強～4割弱でした。サイコロを用いた反復試行の問題は、題意で問われている事象を理解できるよう、組合せに関する様々な問題にあたり対応できるようにしておきましょう。

● 学習上のアドバイス

数学の問題は、出題の基本方針で述べたように基礎的な演算能力や公式の理解力が問われています。したがって、高校の教科書を繰り返し復習しましょう。その際、実際に解いてみて、解けなかった問題は何度でもトライし、完全にマスターしておきましょう。公式は暗記するだけでなく意味も理解することが大事です。グラフの問題はグラフを描いて考えましょう。確率の問題は題意の事象を書き出してみると、意外と簡単になることがあります。

● 出題の基本方針

英語の基礎力を総合的に測ることを基本方針としながら、日常的な話題について文章および図表などから必要な情報を整理し、理解することができているかを問う複合問題が出題されています。問題構成の修正で問題数が増えたかと思いますが、解答数は減っています。

● 出題内容とねらい、採点講評

出題内容

各方式の問題構成は概ね次のようになっています。

A方式 第1問 英文整序問題

第2問 文法・語彙・語法問題

第3問 会話文・複合問題

第4問 会話文問題

第5問 中文空所補充問題

第6問 長文読解問題

B方式 第1問 英文整序問題

第2問 文法・語彙・語法問題

第3問 会話文問題

第4問 中文空所補充問題

第5問 中文読解問題

第6問 中文・複合問題

第7問 長文読解問題

D方式 第1問 英文整序問題

第2問 文法・語彙・語法問題

第3問 会話文問題

第4問 中文空所補充問題

第5問 中文読解問題

第6問 長文・複合問題

第7問 長文読解問題

出題のねらい

「英文整序問題」と「文法・語彙・語法問題」では、語彙・イディオム・文法・語法の基本的な知識が問われます。

「会話文問題」では、設定された場面で登場人物たちがどのような話題について話しているのかを理解し、自然な会話の流れを組み立てる能力が問われます。

「中文空所補充問題」は、語彙・文法・語法について、文章の内容や構成をつかめているかを確認するために、空所に入る適切な語の選択が求められます。

会話文・中文・長文の「複合問題」では、文章およ

び図表などから必要な情報を整理し、理解することができるかが問われます。思考力や判断力が求められ、英語話者が実際に遭遇する状況に近い設定です。

「中文読解問題」、「長文読解問題」では、多様な問題形式の中で、文章や段落の主題や構成、内容の把握力が問われます。

採点講評

A方式1日目において特に正答率が低かったのは、第2問㉓でした。普段カタカナで呼んでいる言葉でも英語では違う言葉になる単語もあるので気をつけましょう。また、第5問㉔も正答率が低かったため、様々な表現を覚えておくことをお勧めします。

A方式2日目で特に正答率が低かった問題は、第5問㉕でした。いろいろな英語表現を身につけるとともに、本文の内容をよく理解し、適切な表現を選べるようにしましょう。

A方式3日目で特に正答率が低かったのは、第5問㉖でした。日本語でも多く使われる表現ですので、覚えておきましょう。第4問㉗も正答率が低かったです。全体の文脈を踏まえたうえで、最も適切な選択肢を選ぶようにしましょう。

B方式1日目で特に正答率が低かったのは、第3問㉘でした。会話文では前後の発話から自然な流れになるように選択肢を選びましょう。また、第4問㉙も正答率が低かったです。過去分詞の形容詞的用法ですが、名詞を後置修飾することもあることに注意しましょう。

B方式2日目では、第7問㉚の正答率が低かったです。いつも形容詞や名詞として使っている単語に、動詞としての働きがあることもあります。語彙を増やすには、このような点にも着目して学習しましょう。

D方式で正答率がやや低かったのは、第3問㉛でした。発話者が主張したいことに注目しましょう。第6問㉜～㉞の一つも若干正答率が低かったです。図表や注意書きにもしっかり目を通しましょう。

● 学習上のアドバイス

複合問題は過去にも出題されましたが、「用語や用法の区別などが中心とならないよう、実際のコミュニケーションにおいて活用できるようにする」という現行の学習指導要領のねらいに則して、今後も出題されるであろうことに留意してください。

● 出題の基本方針

国語の出題の基本方針として次のような能力を期待し作問しています。

まず、ある程度の量の文章を読み通せることです。多くの問題の課題文は6ページ前後あります。時間内にこの量の文章を読み込み、考えて解く力が期待されます。次に、文章の意味を理解できることです。具体的には、文章中の各段落間の関係をしっかり捉えることで、文章全体の主旨を把握することが期待されます。たとえば、文章の中の指示語の内容を適切に理解できているか、適切な接続詞を選ぶことができるか、文意において適切な文章の順番を導けるか。こうした形式の問題は、本文の理解について問うたものです。加えて、ことわざや熟語などの日本語表現や漢字の知識をもっていることです。以上のような能力や知識を想定し、各問題は出題されています。

● 出題内容とねらい、採点講評

A方式1日目は第一問が梅澤佑介『民主主義を疑ってみる』、第二問が高階秀爾『エラスムス 闘う人文主義者』からの出題でした。前者は政治的責任に対する向き合い方、後者はオランダの人文主義者エラスムスの思想についての文章です。第一問において正答率が低かったものは漢字問題問9の㊶ (15.2%)、㊷ (27.7%) でした。第二問は全ての設問の正答率が50%を上回っていました。

A方式2日目は第一問が今井むつみ・秋田喜美『言語の本質 ことばはどう生まれ、進化したか』、第二問が和泉悠『悪口ってなんだろう』からの出題でした。前者は言語の身体性、後者は悪口についての文章です。第一問において正答率が低かったものは問6 (28.0%)、問7 (33.5%)、第二問においては問6 (39.1%)、問5 (42.8%) でした。

A方式3日目は第一問が岡田桂「性の境界とスポーツ」(『スポーツとLGBTQ+』所収)、第二問が白倉伸一郎『ヒーローと正義』からの出題でした。前者はスポーツにおける身体の公平、後者は二元論的世界観の構築についての文章です。第一問において正答率が低かったものは問2 (29.5%)、問8 (32.8%)、第二問においては問1 (35.0%)、問4 (40.2%) でした。

B方式1日目は第一問が青木保『異文化理解』、第二問が『十訓抄』からの出題でした。前者は異文化理解におけるコミュニケーション、後者は養老の滝伝説

についての文章です。第一問において正答率が低かったものは問8 (14.0%)、問6 (38.4%) でした。第二問において正答率が低かったものは問9 (21.9%)、問10 (35.5%) でした。

B方式2日目は第一問が森田亜紀『芸術と共在の動態』、第二問が『十訓抄』からの出題でした。前者は「見せること」を通したコミュニケーション、後者は平安中期の大江匡衡と藤原有国についての文章です。第一問において正答率が低かったものは問4 (14.1%)、問8 (27.3%) でした。第二問において正答率が低かったものは問5 (39.1%)、問1 (45.7%) でした。

D方式は第一問が村田純一『技術の哲学』、第二問が永井玲衣「ずっとそうだった」(『水中の哲学者たち』所収) からの出題でした。前者は技術をめぐる哲学のあり方、後者は哲学対話についての文章です。第一問において正答率が低かったものは問5 (22.3%)、問1 (32.4%) でした。第二問においては問9 (49.2%) を除き、正答率が50%を上回っていました。

● 学習上のアドバイス

国語の試験は多様なジャンルから、ある程度の量の文章が出題されます。日頃から様々なジャンルの文章をできるだけ多く読むことが大切です。漢字や熟語、表現を学ぶためにも、小手先のテクニックに頼るのではなく、読書の習慣を身につけることが重要です。

そのための学習として、まずは1ページで終わる文章ではなく、新書の1章分などある程度分量のある少し長めの文章を読んでみましょう。自分の関心のあるテーマの本でかまわないので、集中して読むことに慣れることが大切です。そのうえで段落や文章全体の内容を正確に読み取る能力を身につけるように心がけましょう。特に指示語の内容や、段落間の関係を示す接続詞に注目して、理解ができるまで繰り返し読むことで、その文章や章全体が何を主張しているのか、より明確に理解することができます。

慣れてきたら、今度は読む文章のジャンルを変えてみましょう。幅広いジャンルの文章を読むことで、熟語やことわざなどの慣用表現の知識も増えていきます。知識が身につくといけば、さらに読むことが楽しくなるでしょう。読書を楽しめるようになれば、問題を解く能力も伸びてくるでしょう。

● 出題の基本方針

全方式・日程を通じて大問2題を出題しました。A方式・B方式は第1問が近世以前（江戸中期まで）、第2問が近代以後からの出題、D方式は両問とも近代以後からの出題としました。

全方式・日程を通じて、古代から現代に至る全時代の様々な分野について網羅するようにしました。設問は語句選択、正誤問題、年代配列問題、語句説明、グラフ等の読み取り問題など、多彩な形式で構成しました。全てマーク式の選択問題です。

問題作成にあたっては、高校の教科書に掲載されている内容からの出題を基本としています。教科書本文の記述に加え、説明を補完している写真や文献・史料、図表やグラフなども利用して、それぞれの出来事と時代背景との関わりとを問うことを旨としました。

難問・奇問は避けて、いずれの日程も6割程度の正答率となるように作問しました。

● 出題内容とねらい、採点講評

A方式1日目は、第1問で源平の争乱、南北朝の対立、元禄文化（図版問題含む）を出題しました。第2問では、土族の商法の絵を読み解く問題、西洋建築の導入、徳川家達、北部九州の石炭産地についての問題を出題しました。A方式2日目は、第1問で6～7世紀の朝廷政治、8世紀末の蝦夷との関係、保元の乱以後の平氏政権、南北朝期の歴史書、江戸幕府初期の朝廷と幕府の関係について出題しました。第2問では、明治維新から帝国憲法制定に至る政治史、ロシア正教会の日本大主教の日記を素材にした明治期の政治・経済・文化、大正・昭和初期の金融政策、第2次世界大戦後の経済（図表問題含む）について出題しました。A方式3日目は、第1問で縄文・弥生時代、律令制度、武士団の成長、史料問題、近世の村と百姓、江戸末期の洋書輸入について出題しました。第2問では、明治期の条約改正（グラフ・図版問題含む）、明治期日清関係史、第一次世界大戦期の外交、太平洋戦争開戦に至る外交、戦後外交史（写真問題含む）などを出題しました。

B方式1日目は、第1問で弥生期からヤマト政権期までの遺跡・古墳、8～9世紀の土地制度、平安時代の文化・政治、室町時代の文化（図版問題含む）、戦国大名とその支配について出題しました。第2問では、明治初期の産業近代化（図表問題含む）、後藤新平の業績を通じた政治史、戦時の思想統制（写真問題含

む）、平成初期の政治について出題しました。B方式2日目は、第1問で7世紀の朝鮮半島をめぐる外交、元の襲来、豊臣秀吉の朝鮮政策、通期的な文化（図版問題含む）に関し出題しました。第2問では、日本と台湾の関係、関東大震災と金融危機、東京大学の歴史、少し異色ですが、個人史を通じて文化・学校制度史（図版問題含む）について出題しました。

D方式では、第1問で明治初期の宗教政策（図版問題含む）、大正デモクラシー、戦時期の国民生活の統制（写真問題含む）について出題しました。第2問では、明治期の学校制度、琉球・沖縄の近現代史（グラフ問題含む）、高度経済成長期の経済・生活・社会問題について出題しました。

このように、全方式を通じて幅広い時期・分野にわたり出題し、出題のスタイルも、図版・写真選択やグラフ・表の読み取り、配列問題など多彩な形式となりました。

採点の結果、各日程間の多少のバラツキは生じましたが、概ね60%を少し上回る正答率となりました。人名・作品名を単語で選択する問題は、全体的に高い正答率となりました。他方、語句の説明文を選択したり、出来事を発生順に並べ替える問題など複合的な問題では、正答率が低くなっているものもありました。一例を挙げると、A方式1日目の問18は三池炭鉱の位置を問うものですが、歴史上の事象でも地名を伴うものは、その位置も意識してほしいという出題意図です。一步踏み込んだ探究心を問うことで、得点の差がつく結果となりました。

● 学習上のアドバイス

まず基本となる教科書の内容をしっかりと読み込んで、主要な出来事の成り立ちや概要について歴史の全体像を意識しながら理解してください。その際、時代の流れに沿って一つ一つの出来事の前後関係を因果関係として理解することを意識しましょう。それを通じて、様々な制度の共通点や相違点を時代をまたいで理解でき、また、それらの歴史が現代の日本のありようにも影響していることを理解できるようになります。日本史では、近隣諸国や欧米諸国との外交関係の歴史も学習範囲となりますが、これらも単なる過去の出来事ではなく、現代の国際社会にも影響しています。歴史を現代のありようにつなげるものとして理解できることは、社会科学が中心の本学での学びや社会人としての教養を豊かにしてくれる知的資産だと考えます。

● 出題の基本方針

出題にあたっては、高校での学習内容の理解を問うことを基本方針としました。すなわち、「教科書をきちんと読む」ことができているかどうかを問いました。この基本方針のもと、全方式・日程で、地域や時代の異なる2つの大問から各25問程度を出題しました。問題の形式は、空所補充問題を中心にしつつ、特定の事件・出来事について、その内容や後の時代に与えた影響などを問う文章選択問題や正誤問題も出題しています。問題の内容については、政治史だけでなく、文化史などからも出題しました。また、地理的知識が必要な問題も出題しています。

● 出題内容とねらい、採点講評

【A方式1日目】

第1問は中国史、第2問はヨーロッパ史からの出題です。第1問の正答率は60%強、第2問の正答率は60%弱でした。第1問は、晋から唐までを扱い、中国史の基礎知識を問うものです。空所補充問題はまづまづでしたが、正誤問題・文章選択問題になると正答率が下がる傾向がありました。第2問は、「世界の一体化」から始めて、ヨーロッパ史を経済と植民地支配の視点から描いたものです。歴史を複合的に見るができるかを問うのが出題のねらいです。比較的よくできていたと思います。ただ、正誤問題（問6）の正答率が30%台でした。条約の内容を問う問題の正答率も低かったです（問3）。「教科書をきちんと読む」ことの大切さがわかる問題になっています。

【A方式2日目】

第1問はインド、第2問はロシア史からの出題です。第1問の正答率は70%超え、第2問の正答率は60%台後半でした。第1問はインダス文明からインド＝イスラーム王朝までを範囲とした平易な問題です。ただ、問1の正答率が50%台（58.1%）にとどまったのは意外でした。文明の名称だけでなく、内容も押さえましょう。第2問はロシア史の基礎知識を問うことがねらいです。全体的に正答率が高かったなか、問3・問25は正答率が30%台にとどまりました。問25は条約名が似ているのでややこしいですが、頻出問題です。

【A方式3日目】

第1問はヨーロッパ史、第2問はイスラーム史からの出題です。第1問の正答率は60%強、第2問の正答率は50%台でした。第1問は、大航海時代からウエストファリア条約までを扱った問題です。これも基礎知

識を問うています。空所補充問題の正答率が高い一方で、正誤問題の正答率が低かったです。また、ルネサンス期を代表する芸術家を問う問16の正答率が50%台でした。文化史の簡単な問題なので、押さえておきたいところです。第2問は、オスマン帝国からイラン・エジプト現代史までを扱った問題で、ここでも基礎知識を問いました。しかし、なじみが薄いのか、正答率は比較的低かったです。特に、オスマン帝国の建築家に関する問9（27.8%）、1898年に世界で起こった出来事に関する問18（32.7%）の正答率が低かったです。

【B方式1日目】

第1問は中国史、第2問はインド近代史からの出題です。第1問・第2問ともに正答率は40%台でした。第1問は絵画「清明上河図」から中国史を眺める問題でした（なお、出題にあたって、伊原弘『『清明上河図』と北宋末期の社会』／伊原弘編『『清明上河図』をよむ』〔勉誠出版、2003〕91頁を参考にしました）。かなり難しく感じたかもしれませんが、教科書レベルです。出題形式に惑わされないようにしましょう。第2問のインド史も、相当に難しく感じたかもしれません。しかし、教科書をしっかり読んでいれば解ける問題です。学習の手薄な分野をつくらないことが肝要です。

【B方式2日目】

第1問はイスラーム史、第2問は中南米を含むアメリカ史からの出題です。第1問・第2問ともに正答率は40%台でした。第1問は、問題そのものは難しくはいませんが、文章選択問題が多く、またアフリカ史も含まれていたため、苦戦した受験生が多かったようです。第2問については、アメリカ合衆国に関する問題はそこそこの出来でしたが、中南米となると難しくなったようです。ここでも手薄な分野をつくらないことが大切になります。

● 学習上のアドバイス

アドバイスは次の2点です。まずは、「教科書をきちんと読む」ことです。「教科書をきちんと読む」とは、教科書の脚注・側注まで読むという意味です。必要に応じて用語集や図録の助けを借りることも含まれます。そしてもう1点は、学習の手薄な分野をつくらないことです。「とりあえず一通り勉強しておく」姿勢で取り組むとよいと思います。世界史は、学習すればするほど楽しくなる科目です。カタカナが多いから嫌いなどと言わず、ぜひ深く学習してください。

● 出題の基本方針

出題範囲は「数学Ⅰ・Ⅱ・A」で、全方式・日程で問題に偏りがないように出題しています。出題分野は数と式、2次関数、図形と計量、データの分析、式と証明、複素数と方程式、図形と方程式、三角関数、指数・対数関数、微分法と積分法、場合の数と確率、図形の性質、数学と人間の活動です。各方式・日程いずれも基本的な理解を問うことを目的としています。そのため、公式に当てはめるだけの問題や桁数の多い複雑な計算は避け、できるだけ設定や式の意味を問う問題を中心にしています。難易度は、教科書の例題、演習問題、章末問題を基準としています。一部に応用的な問題もありますが、それらも基本的には教科書の内容を組み合わせたものを出題しています。

● 出題内容とねらい、採点講評

大学に入学後は、学部によって使う数学が異なるため、基礎的な数学的素養を幅広く問う形式になっています。正答率は、A方式が4～5割、B方式が約3割、D方式が約4割です。全体的な講評としては、方程式や関数の最大・最小の問題については正答率が比較的高いです。一方で、図形の問題は基本的な問題でも正答率が低い傾向がありました。以下では正答率が特に低かった問題について解説します。

【A方式1日目】

第3問(3)のii)は、i)が誘導になっています。ACで平行四辺形を折り返した際に重なる部分は、ACを底辺とする二等辺三角形です。底辺の長さや挟む角の $\tan$ をi)で求めているので、その面積は計算できます。

【A方式2日目】

第2問(1)のii)は、「 $a=b$ 」であるための必要十分条件を「 $a=c$ かつ $b=c$ 」とする誤りが多くみられました。正解である「 $a\geq b$ かつ $a\leq b$ 」との違いを考え、必要条件、十分条件、必要十分条件の意味を理解してください。

【A方式3日目】

第3問(3)は、各集合の xy 平面における形がわかれば、解を得るのに計算は要りません。 xy に関して対称であることを利用して、丁寧に作図してください。

【B方式1日目】

第3問(3)は他の変数によって (x, y) が表現されており、一般にその軌跡の分析は難しいことがしばしばあります。ただし、本問は円周となるかどうかを確かめるだけです。本問の場合は、(a) $x^2+y^2=1$ 、(b) $-1\leq x\leq 1$ 、(c) $-1\leq y\leq 1$ を調べます。②は(a)が、④は(b)・(c)が、⑤は(c)が成立しないので円周とはなりません。⑤の y について、分子の次数を下げると $-1+\frac{2}{1+t^2}$ となりますが、 $\frac{2}{1+t^2}$ は決して0にならないことに気がつけば $y\neq -1$ がわかります。

第4問の後半も正答率が低かったです。折り返した円弧を含む円は、 x 軸に接する、中心が $(t, 1)$ 、半径が1となるものです。折り返す前の円との関係を利用すれば、解くことができます。

【B方式2日目】

第1問(4)は無解答が多く見られました。問題は、進む速さの早いものが先行する遅いものに追いつく時間を求めるシンプルなものですが、見慣れない形であったためかもしれませんが、内容を理解すれば解くことは難しくないと思います。

第4問は、(1)が誘導となっています。(2)以降は、相似の関係を利用して辺の長さの比や角度を求めていけば、複雑な計算をすることなく解が得られます。

【D方式】

第2問(4)は、4つの円の関係が理解できれば半径は簡単な計算で求まります。それぞれの円がどのような配置になっているのか図に表してください。

● 学習上のアドバイス

教科書を用いた学習が基本です。問題を解くときには、公式や解き方を覚えるのではなく、どのような考え方なのかを理解するようにしましょう。理解が伴わなければ、応用できませんし、すぐに忘れてしまいます。理解をするには、内容を図やグラフにきちんと表すことが有効です。そして試験では、何より問題をよく読み、先入観にとらわれず問題の設定を完全に把握することが重要です。ここでも図が役に立ちます。これまで出題された応用力を問う問題も、図に示すと内容が整理できて難易度が下がるものが多いです。また、計算力は基礎として確実にするため、基本問題を繰り返し反復するような学習が望まれます。

● 出題内容

菅野仁著『友だち幻想 人と人の〈つながり〉を考える』（ちくまプリマー新書、2008年）より抜粋し、一部を変更して出題しました。

著者は、他者との関係を深めるためには、相手からの働きかけに対してきちんとレスポンスがとれるという意味における「受身の立場」に立つことが重要であるとしています。しかし、そうした受身の立場であることを阻害する「コミュニケーション阻害語」というものが若者たちにしばしば使われており、こうした言葉は他者とのコミュニケーションにおいて相手からのまなざしを回避する道具として機能するので、他者とのコミュニケーションの作法を学ぶ10代の若者にとっては望ましいものではない、と結論づけています。

問1は300字以内の本文要約、問2は500字以内の意見論述で「コミュニケーションの作法を学び取るためには、どのような取り組み（行動、心構え）を行えばよいか」について述べることを求めました。

● 採点方法

各々の答案について2名が採点にあたり、平均点を得点としています。課題文の内容を的確に把握しているか、題意に即した論述をおこなっているか、文章の表現や構成が適切であるか、という観点から、本学で学ぶにあたって十分な学力を備えているか否かを評価しました。

● 講評

問1に関してはおおよその確にまとめられていますが、たんに各段落のキーセンテンスをパッチワーク的にまとめただけでなく、段落間の論理的な理由関係（たとえば、著者が重視する受身の立場の定義に、相手にレスポンスを返すことが含まれるがゆえ、一方的に相手を評価する「コミュニケーション阻害語」が問題となるというロジック）を踏まえられているかという点はばらつきがありました。

問2については、問題文と関連させつつ「自身の考え」を例とともに述べた優れた解答も複数あり、こうした答案には問題文に書かれていることを繰り返しただけのものよりも題意に沿ったものとして高い評価が与えられました。

● 出題内容

村上靖彦『客観性の落とし穴』（ちくまプリマー新書、2023年）の第4章の冒頭から出題しました。この文章に基づく設問を2問設定し、問1は本文の要約を300字以内で記述、問2は「著者の主張に賛成か反対かを明らかにした上で、なぜそう考えるか」を500字以内で記述することを求めました。なお、賛成・反対のいずれを選択するかは自由であり、点数に影響はしません。

● 採点方法

60点を上限とし、問1を20点、問2を40点の配分としました。

問1は、問題文の内容を正しく読み取り、要約しているかという観点から採点しました。

問2は、著者の意見を正しく読み取り、それに対して自分の意見を述べているか、また具体例を入れて自分の主張をサポートしているかどうか注目して採点しました。

● 講評

問1はほとんどの受験生が正しく要約をおこなっており、差はあまり見られませんでした。

問2は、「著者の主張」の解釈に大きなばらつきが生じており、差が大きかったです。著者が批判的に説明している内容について、著者が肯定的であると捉える解答も少なくありませんでした。また、無理に自らの経験やエピソードにつなげる解答も多数見られました。

小論文

出題のねらいと講評

● 出題内容

問題文は、2024年7月24日『読売新聞』（朝刊）の「パリ五輪開幕へ 戦時下に平和の尊さかみ締め」という社説からの出題でした。内容は、パリ五輪を題材にしたもので、ウクライナなどの戦禍に苦しむ人々に希望を与える可能性を有する五輪の意味を問うものです。一方で、ロシア・ベラルーシの選手が個人資格で出場する実情、コロナ禍で無観客開催の東京五輪と異なり、観光名所や競技場外での会場開催における犯罪抑止の課題や、競技団体の資金の使途などの問題も取り上げられており、小論文問題の出題としては妥当な内容の記事であると考えます。問1は本文のポイントを4点挙げてその要約を求めるもの、問2はパリ五輪で印象に残っている出来事を述べるもの、問3は「平和の祭典」としての五輪のあるべき姿について、自身の意見を求めるものでした。

● 採点方法

採点者は5名からなり、2名がペアとなり同一問題をそれぞれが採点し、その平均値を四捨五入して総点としています。評価方法について、問1～問3をあわせて丁寧に解答しているか、問1は字数、4つのポイントそれぞれが的確にまとめられているか、問2は字数と的確に解答できているか、そして問3は字数と内容（文章力も含む）を評価の指標としました（合計80点）。また、2つのペアの平均値をあわせることで、採点の平等性を図りました。その結果、全体の平均点は満点80点中53.1点となりました。

● 講評

大多数の受験生が、文字数的に十分な量を記述しており、内容的にも不適切な解答は見られませんでした。全体の「丁寧に書けているか」においても、普通レベル以上の高評価を得ていました。

問1の要約問題では、概ね4つのポイント中3つのポイントの正解が多く見られました。

問2は自身の競技経験と関連させた記述も散見され、自身の認識を適切に表現していました。

問3の意見論述では、問題文全体の趣旨を踏まえた問題意識が述べられていました。

小論文

出題のねらいと講評

● 出題内容

井田良ほか『法を学ぶ人のための文章作法〔第2版〕』（有斐閣、2019年）より、一部を改変して出題しました。問1では、この文章を500字以内で要約することを求めました。問2では、この文章で説明されていた法的論証における思考過程を実践してもらうような簡単な事例問題を出題しました。

本入試に合格して経営学部ビジネス法学科に入学した場合、法学科目を多く履修することが想定されますので、法学に関連する文章を選んで出題しました。ただし、法学の知識・理解を問うものではなく、その基礎となる文章の理解力、思考力、国語の表現力を測る問題としています。

● 採点方法

各々の答案について、必ず複数の採点者が採点にあたり、その平均値を四捨五入して総点としました。問1を30点、問2を20点の配分としました。

問1は、文章の内容を正しく理解し、各事例の違いに気づけているか、また、そのうえで文章の内容を適度に抽象化させながら要約しているかという観点から採点しました。

問2は、結論が適切であるかだけでなく、論理的な思考過程を経てその結論に至っているか、かつ、その思考過程を過不足なく表現しているかを重視して採点しました。

● 講評

ビジネス法学科の講義やゼミでは、法学に関する長い文章を多く読むことになるでしょう。そして文章の内容を正しく理解し、異なる意見や主張を整理しながら、自分の見解を論理的に表現する訓練をしていきます。本入試では、その基礎となる日本語運用能力を測る問題を出題しました。受験の時点で法学に関する知識や理解を求めるものではありません。

全受験生において、著しく不十分な解答は見られませんでした。しかし、問1において文章の一部にしか言及していないもの、問2で思考過程の論証が不十分なものはありました。合格した場合でも、入学までに良質な図書の多読を通じて、国語力を総合的に鍛えておきましょう。

小論文

出題のねらいと講評

● 出題内容

湯浅誠『「なんとかする」子どもの貧困』（角川新書、2017年）の一部から出題しました。

この文章に基づく設問を2問設定し、問1は本文の要約を100字以内で記述、問2は本文の内容について、自身の考えを800字以内で書くことを求めました。

● 採点方法

50点満点で採点しました。1名の受験生の答案を3名の教員で採点しています。教員は各コースから1人ずつ選出し、担当しました。受験生が書類審査において、どの専門コースの課題を選択したのかは伏せて採点しています。

問1では要約の抽出、簡潔さ、論理的な構成、本文の意図の保持、文法・語彙の正確さを各2点合計10点で採点しました。

問2では本文の理解と対応、自分の意見の明確さと独自性、論理的な構成と展開、本文との関連性、表現力と文章の正確さを各8点合計40点で採点しました。

● 講評

高得点の解答は、本文の意図と理解をしっかりと読解したうえで、主張が明確であること、論理的な構成と展開ができている、複数の視野で対象を捉えられている、独自の見解を展開しているなどの傾向にありました。

低得点の解答は、逆に本文の理解ができておらず、論理的な構成ができていない、自分の意見があいまい、視野の狭い意見となっているなどの傾向にありました。

日本語

出題のねらいと講評

● 出題内容

筆記試験は、谷川嘉浩『スマホ時代の哲学 失われた孤独をめぐる冒険』（デイスカヴァー・トゥエンティワン、2022年）から出題しました。SNSなどのメディアとの関わりが深い受験生の世代の価値観や行動様式につながる内容であるという理由から本書を採択しました。アテンションエコノミーに由来する消費環境下では、注意の分散が不断に促されるため、他者と真摯に向き合うことや、物事を深く考えることが阻害される、といった問題が提起されています。

この文章に基づく設問を2問設定し、問1は100字以内の本文要約、問2は本文の内容を踏まえて自身の考えを200字以内で書くことを求めました。

● 採点方法

筆記試験の採点は、各答案について2名で採点しました。採点基準については、問1の要約の設問では出題文の主旨の理解度と日本語の適切さに注目し、また、意見を述べることを課した問2では、内容の妥当性と日本語の表現力に重きを置いて評価しました。採点は各グループでの平均点を採用することを原則としましたが、採点結果に著しい差がある場合は改めて吟味し、公正性を担保するよう努めています。それぞれの設問の文字数に鑑み、問1（100字）を40点、問2（200字）を60点満点として採点しました。

● 講評

要約の設問では、要約というよりは、本文からそのまま引用する答案が目立ちましたが、抜粋箇所から判断する限り、出題文の大意は理解できていたことがうかがえます。自らの考えを述べる設問では、アテンションエコノミーの問題点について、客観的な視座から具体的な事例と根拠を示しつつ自説を展開する建設的な論述も見られましたが、一方で、恣意的な好悪を述べることに終始した答案もありました。